

<今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙 I 2章 6～9 節>
信仰を持つ時、知恵の内容も変わります。そこに新しい世界が開けて来ます！

1 知恵は信仰の邪魔をする？ アテネでのパウロの経験から。

パウロはアテネ伝道で、人間の知恵を用いようとして失敗しました(2:1-5)。それでコリントでは、「神の秘められた計画を宣べ伝えるのに優れた言葉や知恵を用いませんでした」(2)。それは、「人の知恵によってではなく、神の力によって信じるようになるためでした」(5)。

2 再び「知恵を語る」と言うパウロ(6)。矛盾している？ 否！

しかしその後すぐに、「信仰の成熟した人たちの間では知恵を語ります」(6)と言います。矛盾しているでしょうか？ していません。この後を讀むと、その「知恵」は人間が考えつく知恵ではなく、「神の知恵」(7)、つまり、神様がキリストによってなして下さった救いを指す知恵だからです。

さて、この知恵、神様の救いの業についての知恵を私たちが知らされて、何が変わるのでしょうか？ 私が心動かされた二つの内容を紹介しておきます。

3 「理解せんがために我言ず」 アンセルムスが見出したこと。

①アンセルムス(1033-1109)の場合

私たちは、神様を信じるために、自分の知恵と知識を駆使して理解しようとしています。理解できたら信じる—そういう順番です。しかし、②で述べたように、私たちが理解できることを超えた内容だったら、その順番は正しいとは言えません。神様の差し出して下さった救いはそういうものです。だから、自分の自信や正しさが打ちのめされた時に、また疑問を感じた時に、神様の大きな救いの出来事を受け入れられるのです。アンセルムスは、自分を中心に置いたままで持っている知識や知恵で神様を理解しようとするのではなく、イエス・キリストを与えて下さった神様を信じ、その中で示された教え(知恵!)を土台にしてこの世界の色々なことを理解して行くのが本当の順番なのだということを示したのです。

②アウグスチヌス(354-430)の場合

古代の最大教父アウグスチヌスは、聖書の隣み深い唯一の神様がこの世界の創造主であり救済主であることを知り、それを信じ、聖書が語っている内容からこの世界と人間を理解することを始めた人です。その時、それまでの古代の世界観、すなわち得体の知れない力に覆われた世界観から解放され、この神様の手の中に置かれている世界として理解する時代が始まったと言われています。